

鹿児島でのスポーツ鬼ごっこの活用方法

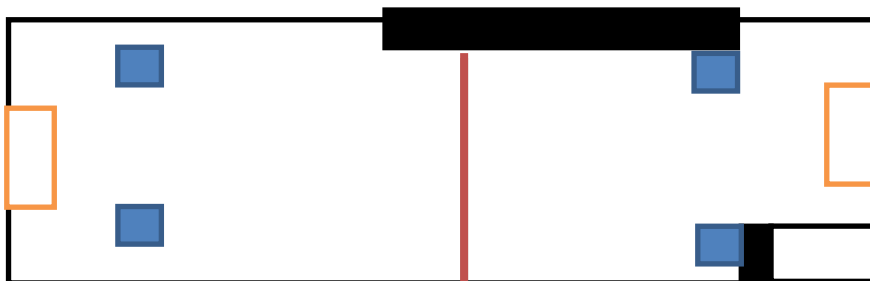
ー放課後等デイサービスの子ども達ー

(鹿児島市スポーツ鬼ごっこ連盟 代表) 池田 智浩

キーワード：療育施設、スポーツ鬼ごっこ、障害児

放課後等デイサービスに通う子ども達を対象に、スポーツ鬼ごっこを定期的に活動に入れて、どのような効果・変化が起きていくか調べてみた。

①部屋の図 横9メートル 縦4, 5メートル



放課後等デイサービスに通う小学生を対象に、3 か月間体操教室の時間と遊びの時間に定期的に実施した。スポーツ鬼ごっこの導入として、いくつかの遊びを取り入れた。①部屋鬼Ⅰ＝2人組で、赤い線からスタートして1人の鬼に両手タッチされずどちらかがオレンジの部屋に入れたら勝ち。タッチされたら赤い線にもどる。②部屋鬼Ⅱ＝3人組で、赤い線からスタートしてSエリア(青い□)を使いながら、1人の鬼に両手タッチされず1人がオレンジの部屋に入れたら勝ち。

③宝鬼＝①と②の鬼ごっこでオレンジ部屋にトレジャーを置き、取ったら勝ち。

発展として、鬼役を子どもにさせたり、鬼の人数を2人にして行った。

④3対2スポーツ鬼ごっこ＝③の宝鬼の発展で、AとBの2チームに分かれ最初にAチームが60秒間3人で、Bチーム2人の守りから何点とれるか。その後、攻守を交代して、たくさん点数を取ったチームの勝ち。

⑤スポーツ鬼ごっこ3対3＝①②③④の遊びの練習を行い、安全面を考え3対3のスポーツ鬼ごっこを実施した。

スポーツ鬼ごっこの効果と変化＝①チームメイトの得点をチームとして喜べるようになった。最初の頃は、チームメイトが得点をしても「自分がとりたかった」という子がいたが、今では、得点の喜びを分かち合えるようになっている。②チームとして勝つために自分から守備をする子が出てきた。前までは、自分が点をとりたい、自分が攻めたいという子が多かったが、チームが勝つために「僕が守るから〇〇さんと〇〇さんはせめて」と言う声も出てくるようになった。③タッチされない様に動くということが出来るようになった。

てきた。相手陣地に入って止まってしまう子や、トレジャー目掛けて真っ直ぐに突っ込んでしまう子がいたが、タッチをされないように左右に動いたりフェイントをかけたりという子が見られるようになってきた。

まとめとして、最初は「チームで戦う」という意識がなく自分がトレジャーを取ろうとしてばかりで、「おとりになる」という考えもなかった子が、3ヵ月ほど実施して、今ではゲーム性を理解して、「チームで協力するスポーツなんだ」と意識してきた。攻撃、守備の役割を決めるなど、子ども達なりに、作戦を立てて取り組むことができるようになってきた。また、「勝つためには練習しなきゃいけないんだな」「負けても次頑張ればいいんだな」と前向きに考えることが、増えたように感じる。そのぶんバチバチと言いかうこともあるが、スポーツ鬼ごっこを通して心の成長をすごく感じた。スポーツ鬼ごっこは、今後の子ども達の心の成長にもすごく良い効果がうまれると考えている。